

業界の女性経営者が語り尽くす



国産キャンピングカービルダー
山口寿子さん



輸入キャンピングカー販売店
安達二葉子さん

対談

SPECIAL TALK

キャンピングカーライフは女性が創る時代

【司会】キャンピングカーを購入するとき、奥様方に購入決定権があるという話をよく聞きます。

つまり、旦那さんが選んだキャンピングカーでも、奥様が「NO」といえば、そのクルマは購入対象から外れてしまうといわれています。

一方、奥様が気に入られたクルマは、購入される率が高まるそうです。

そこで、旦那さんのキャンピングカー選び

と、奥様のキャンピングカー選びはどこが違うのか？

それにまつわる微妙な話を、「女性の願い」や「女性のホンネ」を交えながら、キャンピングカー販売に関わる女性経営者のお二方に語っていただきたいと思います。

キャンピングカーは男のロマンか？

【司会】まず、キャンピングカーに関心を持つのは、男が先か、女が先か、これに関してはどうですか？

【山口】キャンピングカーというのは、昔から「男のロマン」だったと思うんです。展示会やお店の方に来られる方々を見ても、まず旦那さんが興味を持っていると知識を身につけてから、奥さんを同伴して来られるというケースが多いんですね。

ただ、いつも感じるのは、やはりお二人の間に微妙なズレがあることなんです。奥様は、旦那様が気に入ったクルマに対して、必ずしも満足していない。あるいはその逆もあります。

ひとつ言えることは、多くの奥様方から見て、「今のキャンピングカーは女性にとってまだ完璧なものになっていない」ということなんです。

そこで、うちでは女性の意見をなるべく採り上げた商品開発をしたいと思い、女性の方々からアンケート調査や聞き込み調査を行ったりもしています。

【安達】日本人の場合、確かに旦那様の「男のロマン」から始まりますよね。

私の場合は、主人と一緒にヨーロッパを旅しているとき、主人が突然「キャンピングカーを買おう」といったのがキャンピングカーライフの始まりでした。

当時は、「旅」といえばホテルを泊まり歩くものだとばかり思っていましたから、「キャンピングカーの旅」といわれても、それが快適なのかどうか、そんなことすらイメージに浮かびませんでした。

でも、実際にキャンピングカーの旅を始めると、「自由」と「快適性」と「気楽さ」がすべて簡単に手に入ってしまう、世界観が変わりました。そういった意味で、主人の「ロマン」に感謝です。

奥様を“女王”にするのが秘訣

【司会】奥様たちが、旦那さんの選んだキャンピングカーに、満足するか、しないかという“分かれ目”には何があるんでしょう？

【山口】奥さんが元々キャンプが好きだったり、アウトドアに馴染みがあるようなカップルの場合は、好みが分かれることはほとんどないんです。

特にそういう夫婦に子供がいれば、親たちはキャンプを通じて、子供に「自然を学ばせたい」という意識を持つようになるでしょうから、キャンプ道具もしっかり積めるような、アウトドア志向の強いキャンピングカーを買われるケースが多いようです。

しかし、キャンプの経験のないような奥様の場合は、キャンプとかアウトドアというのは、ものすごく面倒くさく感じられるものなんです。

キャンプ場などで、火を熾して、ご飯を作って…というキャンプは、家の中の家事よりも負担感が強くなるんですね。

そうすると、キャンピングカーを買うよりも、やはりホテルに泊まる方が楽に思えるのでしょね。

【司会】では、奥様方にキャンピングカーの旅に関心を持ってもらうには、どうしたらいいのでしょうか？

【山口】ひとつは、まず旦那さんが、奥様にはぜったい負担をかけさせないような「旅のビジョン」を明確に打ち出すことでしょうね。

奥様方というのは、家庭にいるときは、さぞごん家事に手こずらされるわけですから、旅行に来てまで家事などをしたくない…というのがホンネでしょう。

だから、キャンプ場でバーナーを出して、お米を研いで、皿を洗って…というようなことまで奥様にやらせるようだと、キャンプの嫌いな奥様はまず乗ってこないでしょう。

【安達】ヨーロッパでキャンプ場に泊まっている人たちの間では、調理や洗い物は、みな旦那さんの役目なんです。

向こうのキャンプ場で、私が洗い場で皿を洗っていたときのことなんです、周りの旦那さんたちが私の主人に対して怒るんですよ。

「君は、お手伝いさんを雇っているつもりなのか？」って…(笑)。

でも、彼らだって、料理や片づけを率先して行うのは、別に奥さんの尻に敷かれているからではないんです。キャンプに来たときの「レジャーのひとつ」なんですって。普段やれないことを楽しんでいるんですね。





旦那さんが先行する日本。 夫婦が肩を並べるヨーロッパ

【安達】日本では、男性が先にキャンピングカーに興味を示し、奥様がそれに追従するという手順を踏みますけれど、ヨーロッパでは、夫婦が同時に興味を持つんですね。

それは、結婚生活というものの中に、最初から「何年ぐらい先にはキャンピングカーの購入を検討しよう」というプログラムが組み込まれているからなんです。

だからキャンピングカー販売店に最初に訪れるときから、ヨーロッパでは夫婦同伴です。そして、2人でほぼ同時に決めてしまう。

「家に帰ってから女房と相談してみる」とか、「話したら奥様が許してくれなかった」とか、旦那さんが語るケースは、向こうにはありません。

【司会】奥様方は、キャンピングカーのどんなところに注目するのでしょうか？

【安達】私は自分が買うときに、最初に注目はしたのにはクルマの外形的なスタイルでした。

最初はキャンピングカーのことを何も知りませんでしたから、まず形の美しいものを

写真の中から選び、その後でそのクルマがわれわれ夫婦にとって妥当なものかどうか、主人に判断を委ねました。

【山口】やっぱり女性はどうしても視覚的なものから入っていきますよね。それも、まず自分の好みに合うかどうかを一瞬のうちに決めてしまいます。外装のグラフィックから家具の質感や色合いまで、ほとんど直感的に判断します。

ただ、女性というのは、そういう雰囲気だけで判断するだけでなく、「このクルマを買っても、元が取れるだろうか？ 使いこなせるだろうか？」という現実的な視線でもクルマを見ているものなんですね。

特に、いろいろな事情でセカンドカーを持っていないような場合は、その1台で買い物や送迎もこなさなければなりませんから、たいていの女性はサイズに敏感になります。

「私でも運転できるかしら？」というようなことは絶対見逃しませんね。

仮に、奥様が運転免許を持っていないくても、家の前の道路の幅とか、車庫との関係とか、そういうことを直感的に思い浮かべ、稼働率がどのくらいになるかなどを結構シビアに計算したりしています。

【安達】私のところが扱うようなキャンピングカーは、サイズも多少大きい輸入車が主流ですから、稼働率は高くないでしょう。

代わりにお客様がチェックされているのは「耐久性」ですね。

たとえば、「何度も買い換えるようなクルマではないので、長く満足して使えるかどうか」

それに関して、おもに男性はベース車の機構やメンテナンス体制に関心を持ち、女性は家具や装備類の造り込みに興味を示すというように、それぞれの見方でチェックされています。

男性は機能を求め、 女性は調和を生きる

【司会】家具や装備類の使い勝手などに関して、女性は何を基準にして自分の見方を定めているのでしょうか？

【安達】私は、その女性が育ってきた家庭環境とか、現在住んでいる住宅の環境などが意外と反映されているように思うんです。

だからシックなインテリアの中で育ってきた人は、クルマにもそれなりのテイストを求め、華やかな色柄のインテリアになじんできた人は、同じ傾向のクルマを好みます。

若いカップルなどの場合は、現在住んでいるマンションや住宅のインテリアの流行りが、そのままクルマの内装を選ぶときにも反映しているように思います。

【山口】「判断基準」ということに関していえば、やはり、小さい頃から「機械」に興味を感じる男の子と、「おままごと」を楽しめる女の子のそれぞれの“文化”がそのまま継続されているように感じます。

そのため、男性の場合は圧倒的に機能的なものに関する関心が高く、「サブバッテリーの増設は必要か」とか、「インバーターでどのくらい持つか」とか、「ソーラーを付けたらどうなる？」といった方向に話題が集中するんです。

けれど、女性は、そういうことは分からない部分なんです(笑)。

女性は、それよりも、そういう「電気」が確保されたときに、部屋の中にどう照明が実現されるのか？ そのことにより、家族と過ごすダイネットがどう雰囲気になるの

か？ そちらの方が大切なテーマなんですね。

【司会】そのような違いは、どうして生じるんでしょうね？

【山口】やっぱり、男性は昔から狩猟して、外でエモノをとってきて、妻子を養うという生活が“文化のDNA”みたいな形で残っているんじゃないでしょうか。

だから、エモノをしとめる武器の構造とか、狩を効率よく行うシステムなどに関心が向く。それに対して、女性は、男がとってきたエモノをどう家族に分配するか。どう調理して、みんなでおいしく食べるか。男の労働をどうねぎらってやるか…というような、常に「家族全体」のことを考えながら生きてきたと思うんです。

だから、女にとっては、「家族の関係」こそが大事なんですね。

キャンピングカーも同じであって、そういう男性と女性の組み合わせのバランスがうまく取れたときに、「よし買おう」という家族の決断が生まれると思います。

【安達】ヨーロッパの場合は、なおのことキャンピングカーを使う男女の分業体制がし

っかり確立されています。

クルマを安全に運転するのは男の役目。それを補佐して、男が眠くなったり、疲れたりしないように、話題にも気を配り、地図をチェックするなどしてケアするのは奥様の役目。

だから、ヨーロッパのキャンピングカーの場合は、助手席を「マダムシート」といったりすることもあります。

【山口】また、ファミリーのある家族には、「キャンピングカーがあれば子供の心が豊かになる」ということをぜひ理解してもらいたいと思うんです。

たとえば、食事を介して、子供たちに健康な食生活を伝えることを「食育」といったりすることがあるでしょ。

また、住宅などにおいても、住み方を工夫することで、子供に暮らし方を学ばせることを「住育」などともいいますよね。

それと同じように、「車育」という概念があってもいいように思うんです。

つまり、家族のコミュニケーションが密に取れるようなクルマがあれば、子供たちだって豊かな家族関係を学んでいけるようになると思うんです。



これからは「車育」の時代

【安達】「車育」というのは、本当にいい言葉ですね。確かに、キャンピングカーには、子供たちとコミュニケーションをとる材料がたくさん揃っていますね。

【山口】今の子供たちを見ていると、学校から帰ってきたらすぐ塾へ行って、10時頃家に戻ってきて、チラッとゲームして…。

それでは、いつ家族と向かい合って、いつ団らんするの？ と心配になってきます。

昔の家では、4畳半と6畳ぐらいの間取りに、親子5人くらいで生活したりしてきたわけですから、否が応でも家族同士で話し合う時間と空間を共有できたわけですね。

だけど、今の子供たちは贅沢に個室を持っていて、それぞれ自分のテレビを持っていて、しかも家族と一緒に食事をとることもない。

それでは、親は子供が何を考えているのか知る機会もなくなるし、子供も、親が何を考えているか分からない。

【司会】それを「キャンピングカー旅行」で解消しようかと…？

【山口】そうです。ファミリーでキャンピングカー旅行をすれば、どうしても狭いダイネッ

トを中心に、家族がみんな集うしかないわけですから、自然に会話も復活すると思うのね。

そのときに、ようやく子供は、自分の学校の交友関係の楽しさや悩みを話題にするかもしれない。

親も、キャンピングカー旅行を通じて、「ゴミを捨てる場所はどこか」とか、「公共駐車場で休むときのマナーはどうだ」とかいうことを、実践を通じて子供に伝えることができるわけですね。それが「車育」だと思うんです。

【安達】キャンピングカー自体が、「旅」そのものも豊かにするというのも子供たちに伝えたいですね。

塩野七生さんのエッセイに書かれていたことなんですけれど、「海外旅行に行くと、日本人は景色を見る前に写真を撮る」って。

で、景色は見ないで、日本に帰ってきてから写真を焼き増したときに景色を確認すると…(笑)。

しかし、そういう旅は豊かさにつながらないように思うんです。

日本人は、よく「写真に残す」とか、「お土産を買う」というように「形に残るもの」に気がつかいがちですけど、時には「形に残さない」旅も必要なのではないでしょうか。

記録に残すよりも、「今ここで味わって

おかないと二度と見られない景色だ」と思いながら風景を楽しんだ方が、後になって思い出すときに鮮明な記憶として残っていることが多いんです。

結局、どんなに宝石とかお金を手に入れても、死ぬ間際にはすべて手放さなければならぬ。そこには「思い出」しか持っていないわけですよ。

そういうことが理解できれば、キャンピングカーの中で家族と一緒に過ごす時間がどれほど貴重なことかということも、みんなで共有できると思うんです。

キャンピングカーの中で、家族と楽しい交流ができれば、過ぎていく時間がダイヤモンドの輝き以上のものになりますよ。

【山口】そういう意味で、キャンピングカーというのは、日頃それぞれ別の生活圏で暮らす家族が集まって家族の絆を確かめあう「ふるさと」ですね。

そういう場があってこそ、親子が共通した「趣味」を持てるようになると思うんです。

「趣味」というものは、親が本当に楽しんでいないと、子供に伝わらないんです。

たとえば、お父さんもお母さんも音楽にあまり興味がないのにもかかわらず、子供を「ピアノ教室」に通わせてあって、子供だって面白いはずがないんです。

親が本当に「楽しい」と思わないと、子



供は何も学ばない。

絵画教室だって、親がスケッチひとつ楽しむこともしないで、子供だけ通わせてあって、子供は何のためにそんなことをやるのか分からない。

だけど、キャンピングカー旅行って、両親のどちらかが、あるいはその両方が、「本当に楽しい!」と思って始めたわけですよ。これは絶対子供の心を動かしますよ。

【安達】それが「車育」ですね。私は「車育」の中には、「食育」も「住育」もすべて含まれるように思うんです。

だって、旅行に行けば、その産地の美味しいものをダイレクトに食べる機会が増えるわけですよ。

いま食べているものの産地を知り、素材を知る。それがキャンピングカーの中ですべてできるんです。そして、ものを食べるときのありがたさとか、食べるマナーなどを学ぶわけですよ。

また、キャンピングカーは動く「家庭」ですから、その中には「住育」も含まれます。

そういうものが、子供たちの脳の中に蓄積していけば、キャンピングカーで育った子は、ものすごく豊かな感性を持つ人間に成長する可能性があるわけですよ。

【山口】そうそう。だから、子供が思春期の

むずかしい年頃になっても、キャンピングカーを通じて親子のコミュニケーションをとっている人々は、気持ちを通じ合うんですよ。

反抗期になって、子供が急に口を利かなくなると、たいていの親はあわてて、「どうした? 何を考えているんだ? 話せ!」ときつく迫るけれど、子供の気持ちを分かっている親は、無理にそんなことをしないんです。

ただ、ギュッと抱きしめるような気持ちで、「いいのよ、しゃべらなくても。私はあなたを信じているから」というメッセージを、言葉にしないで伝えることができると思うんです。

それができるかどうかは、子供が小さい頃から親と一緒にキャンピングカー旅行を楽しんだという点にかかっているのではないのでしょうか。

親がキャンピングカーを好きなら子も習う

【安達】日本ではすぐ「中学生ぐらいになると子供が付いてこなくなる」と言いますが、ヨーロッパでも、子供はある程度の年になると、付いてこなくなるんですね。

ただ、向こうでは、中学生や高校生ぐらいになると、自分たちでキャンプを始めるんです。

もちろん、若いからお金もないのでテントキャンプが多いんですけど、大学生ぐら

いになると、もうお爺さんが使っていた古いトレーラーなどを引いて、自分でキャンピングカー旅行を始めるんです。

【山口】最近日本のキャンプ場でも、大学生ぐらい子供たちがコテージやバンガローなどを利用して泊まっているのを見ようになりましたね。まだキャンプ道具を揃えられないからそうしているのかもしれませんが、たぶん、その子たちは親がキャンプに連れていったのではないかしら?

【安達】日本でも、ようやくそういう流れが生まれてきたのでしょうか。

だから「キャンピングカーの旅に子供が付いてこなくなった」といってがっかりするのは早いんです。

そのお父さんとお母さんは、もうすごい役割を果たしているんですよ。すぐに芽がなくても、種まきをしたわけですから。

キャンピングカーの旅を楽しんだ子供たちは、絶対に自分たちでも始めるようになると思います。

【司会】キャンピングカーの可能性が大きく広がるような結論が出ましたね。ありがとうございました。